ポール・ハリス自伝より

ロータリー理念研究委員会
大内　　啓
（柏南RC）

私たちがロータリーを深く知ろうとした時、創始者ポール・ハリスの自伝はとても貴重な著書である。ポール・ハリスの価値観の根底には、幼年時代に優しい祖父母から学んだ完全、倹約、寛容、善意、無私の精神や小さな田舎町で経験した古い形の友情や隣人愛の世界が読み取れる。学生時代や卒業後５年間の放浪生活は「人はどう生きるべきか」の飽くなき探求の時代であった、人間の生き方に影響を与える動機とは？なぜ良い人と悪い人がいるのか？なぜ自分を犠牲にして人のために尽くす人がいるのか？人間は人種によってどうしてそんなに生き方が違うのか？様々な人の生き方を追求し続ける中に改めて祖父の教えに英知というものを認識する。人は、究極的には、みな「私」の事を考えて生きている。だからこそ、断ちがたい人と人との結びつきは、互いの「私」を認め合うことから始まる。その過程において親睦は有効であり重要な役割を果たす。多くの尊い経験を得たのちポール・ハリスはシカゴに弁護士事務所を開業するが、仕事が忙しくて、自分自身のことなど考える暇がない程だった、しかし日曜や休日はもの悲しい孤独感に苛まれる。そんなある日、友人の郊外の家を訪ね、夕食後、近所を散歩していると、友人は、店の前を通るごとに、店の主人の名を呼んで挨拶する。ポール・ハリスはその姿を見て、幼年時代に過ごした田舎町を思い出す。その時に浮かんだ考えは、どうにかしてこの大きなシカゴで、様々な職業からひとりずつ、政治や宗教に関係なく、お互いの意見を広く許しあえるような人を選び出すことであった。ひとつの親睦関係をつくりだせれば、必ずお互いに助け合うことになるはずだと確信する。しかしポール・ハリスはこのアイデアをすぐには行動に移そうとはせずさらなる検討を重ねる。共同体はどうあるべきかの検討を慎重にかさね、自身の信念を固めるために、自らが考え出した定理に添って実験を重ね統計を取り、定理の正当性を証明し、確信に至るまでに時間を要した。急速な発展に伴い貧富の差が拡大し、加えて腐敗政治の蔓延や利己主義や商業道徳の欠如が目立つシカゴの現状に、お互いに信頼できる者同士が集まって公正な取引を切望した。仕事上の付き合いがそのまま親友関係にまで発展するような仲間を増やしたい、という趣旨のもとに1905年２月、ロータリークラブが誕生した。公正な取引は信頼感を深め、また対人関係においては「条件を伴う信用」ではなく「他者を信じるにあたって、いっさいの条件を付けない信頼」により、より深い友人関係へと発展した。一業一人の相互扶助と親睦を目的としたクラブは、いわば自利を目的としたクラブではあったものが、会員同志で進められる公正な商取引や会員の「寛容で親睦と友情」に満ちた姿は、社会に大きな影響を及ぼし、自分もそう有りたいと望む垂涎の的となる。釈迦の教えのように「親鳥が、餌を取るところを子供に見せ、子供にも同じ方法で餌を取るように教える」といった、自利の活動が結果的に利他につながる善行として注目を集めることになった。日本のロータリアンが共感するのは、こんな心情の源泉があるからだろうか？形式ばったことや、わざとらしいことは傍らにどけておいて、地位や身分に関係なく、人々が同じ平面でつきあいをするロータリー独特の雰囲気のなかで友情はますます深まってゆく。ポール・ハリスは「縦の人間関係」を否定し、すべての対人関係を「横一線の関係」として築いていくことを提唱し，とかく他者の注目を集め「特別な存在」になろうとする「安直な優越性の追求」を戒めてくれている。「人はどうすれば幸せに生きることが出来るか」という哲学的な問いに対し、共同体において、人は、感謝の言葉を他者から聞き、自らが他者に貢献できたことを知るのです。あらためて自らの価値を実感でき、「わたしはここにいてもいいのだ」と自信がもてた時こそ、真の孤独感から解放されるということだろうか。ポール・ハリスの苦悩があったからこそ、ロータリー精神が確立され時代を超えて継承されているように思える。

参考文献

抜粋　ロータリーへの私の道（ポール・ハリス著）

第2790地区ロータリー理念研究委員会
海寶勘一（千葉西）、平山勝已（千葉若潮）、
大内　啓（柏南）、島　正彦（館山）、松田泰長（成田）